

有機農業が拓く道

山形県東置賜郡高島町

星 寛 治

1 豊作を素直に喜びたいが

新しい年が明けた。干支にちなんで猪突猛進と見舞われ、各地で深刻な水不足が現れたが、農民や関係者の必死の努力によって豊作がもたらされた。水のかけがえなさを骨身に刻んだ年であった。ただ、牧草も含め畑作物は干ばつの被害が続出し、大きなダメージを受けたことも見逃せない。

新しい年が明けた。干支にちなんで猪突猛進と見舞われ、各地で深刻な水不足が現れたが、農民や関係者の必死の努力によって豊作がもたらされた。水のかけがえなさを骨身に刻んだ年であった。ただ、牧草も含め畑作物は干ばつの被害が続出し、大きなダメージを受けたことも見逃せない。

新しい年が明けた。干支にちなんで猪突猛進と見舞われ、各地で深刻な水不足が現れたが、農民や関係者の必死の努力によって豊作がもたらされた。水のかけがえなさを骨身に刻んだ年であった。ただ、牧草も含め畑作物は干ばつの被害が続出し、大きなダメージを受けたことも見逃せない。

規制緩和と自由化を錦の御旗にした施策が次々で行われるとき、果たして農業はどうなるのだろうか。自然と人間が一体となって営まれる生命生産の農業においては、無機物を機械的に生産する工業と同じ物差しは当てはまらない。だから今まで、どこの国においても手厚い保護政策が農業に加えられ、その結果として国民生活の安定という見返りを得てきたのである。

一昨年、平成5年は未曾有の冷害と凶作に泣いた。その結果、予想もしなかった米パニックが起きたことは記憶に新しい。スーパーや米屋さんに長蛇の列ができ、いくらお金があっても買えない物があることを今更のように知らされたのである。年輩の人は戦中戦後のひもじかった頃を思い起

し、備蓄の大切さに気付いた人も少なくない。

ところが昨年、平成6年の夏は記録的な猛暑に見舞われ、各地で深刻な水不足が現れたが、農民や関係者の必死の努力によって豊作がもたらされた。水のかけがえなさを骨身に刻んだ年であった。ただ、牧草も含め畑作物は干ばつの被害が続出し、大きなダメージを受けたことも見逃せない。

米は豊作だという情報が流されるや否や、世の中の空気がガラリと変わり、米市場に異変が起きた。自主流通米の価格が弱含みで低迷し、自由米の相場は急落した。うるちは昨年の半値近く、もち米にいたっては買手がない状況になった。カメ虫の被害粒や銅割れなどで規格外になったもち米は1俵60kgで4,000~5,000円という信じられない価格破壊が現実になったのである。その背景には、緊急輸入した在庫米や今年からミニマムアクセスで輸入を義務づけられている米の潜在圧力もあるようだ。いずれにせよ、生産費を大幅に割り込む価格では再生産は不可能であろう。

それに呼応するように、半年前まであれほど国産米にこだわっていた消費者が手のひらを返すように、特裁米のキャンセルをするという話が相次いだ。のど元過ぎて、極楽トンボに帰ってしまったのだろうか。生産者はまたまた冷水を浴びせられる結果になった。人間の価値観や意識の脆さを痛感した場面である。

ただ、幸いなことに、私たちが20年来提携を続けてきた消費者グループからは1件の契約破棄もない。不作の年も豊作の年も、市場相場に関係なしに、前もって取り決めた値段で喜んで受入れている態勢が確立している。人間の信頼関係の太いパイプの中を生活者の生命の糧が流れてい

くのである。

こうした経験を踏まえ、私は農産物の流通は果たして市場原理だけでいいのか、と問いたい気持ちが強まっている。

2 ^{いのち}生命と環境にやさしい農業

私は農業に就いて40年、ひたすら専業農民として生き続けてきた。わずかに3 haの農地に稲とリンゴと自給野菜や飼料作物を作り、数頭の乳牛を飼う複合経営を営んできた。有畜小農複合経営と呼ぶ伝統的な日本型農業の形である。経営の中での資源の循環と家族労働を基本として、極力ロスを出さない生産体系を創り出そうと心掛けてきた。

昭和48年に、若い仲間たち40人と共に、高島町有機農業研究会を創設し、安全と健康を最優先したもう一つの農業の道を目指して歩み出した。全くモデルもマニュアルもない手探りの研究と実践である。近代農法全盛の時代に、農薬も化学肥料も除草剤も使わず、堆肥だけで米作りに挑戦したのだから、その苦勞のほどは今思い出しても言葉に尽くせない。とりわけ、除草剤に抑えられていた積年の怨みを晴らすかのように生えてくる雑草との闘いが、一番辛い仕事であった。「あれは嫁殺し農業だ」と陰口をたたかれたことを後で知った。ある種の変わり者集団と見られ、精神的な村八分状態に置かれた会員もいた。しかも、当初は苦勞した割には収量が上がらず、3割から4割くらい減収をした。化学物質によって痛んだ土がよみがえるには、相応の歳月がかかることを実感することになった。そうした厳しさに耐えて、失敗したらどこに原因があるかを確かめ、翌年はそれを乗り越えようという姿勢を保てたのは若さと集団の力だったといえよう。

有機農業に取り組んで3年目、東北、北海道を記録的な冷夏が襲った。51年冷害である。私の地域は標高300 mの中山間地に位置するので、周辺は半作以下の作柄であった。ところが、畔一本挟んで有機栽培の田んぼだけが山吹色に稔ったのである。作り手の本人が驚くほどの出来栄えは道行く人の視線をハッと釘付けするほどの見事さだった。

「複合汚染」で世に警鐘を鳴らした有吉佐和子さんが「手づくり稲作の凱歌」と讃えてくれたのを

思い出す。続いて、昭和55年から58年まで居座った4年続きの冷害の折にも、ほぼ平年作を確保して、有機農業が異常気象に強いことを証明した。それに力を得て、私たちは有機農法の技術と経営の確立に向けて汗を流そうと誓い合ったのである。

幸いにも、創設期の頃から都市で安全な食べ物を求める消費者と巡り会い、熱心に支えていただいたことが足腰の強さにつながった。いわば、産直提携の草分けの役割を担うことになったわけである。これも最初からうまくいったわけではなく、農法と同じように試行錯誤の連続であった。しかし、生産者と消費者の双方の創意工夫と相互理解と許容力の賜物で、次第に定着するようになったのである。

そうになると、農家の自給段階を超えて、消費者の食卓を支えようという意識が芽生え、それも年間を通して供給することが課題となった。米とかリンゴとかの単品を季節的に届ける型から、他品目少量生産による周年供給へと変えていくことが一つの目標になった。しかも、家畜を飼って良質の堆肥を作り、土を肥やし、美味しい産物を作りたいという願望が自然に高まってきた。

そこまで到着するには、ほぼ10年の歳月を費やした。作柄も安定し、地域の中で市民権を得られるようになった。

昭和57年秋、高島町を会場として、第8回全国有機農業大会が開催され、延べ800名の参加者を得て盛会裡に終了した。そのときのスローガンが「地域に根を張る有機農業運動」であった。初めは首都圏の二、三の消費者団体との産直提携からスタートした新しい流通も、10年目には関西、四国にも広がり、近くの地方都市のグループとも交流が始まり、10数団体との関係に発展していた。

3 共生の技術としての有機農業

昭和60年代に入って、産業構造の変容に伴い、兼業化が激しく進むすう勢にあった。その頃、人手不足と高齢化の合間をぬうようにして、平野部から水田のヘリコプター防除が広がってきた。それまで10数年無農薬栽培で小さな生き物たちの宝庫になっていた私たちの田んぼも空から汚染される心配がでてきたのである。まさに水際に迫った

空散を阻止しようとして生まれたのが上和田有機米生産組合である。

昭和62年春、今から8年前に高畠町和田地区の全域をエリアにして、ほぼ村ぐるみで組織化された有機農業集団は3年目で130戸を結集するまでに成長した。

中山間地の豊かな自然はハンディではなく、むしろ恵まれた条件であるとの発想の転換を遂げ、あらたな希望を見いだそうとしたのである。30代、40代の若手中堅層が機関車になり、菊地組合長のリーダーシップの下に展開された活動は、私たちの長年のストックを傾注したことも加わって、すべり出しから順調であった。農協や行政との関係も大切にし、主体性を持った積極的な日常活動の成果はすぐに現れ、間もなく小さなブランドを形成するまでになった。

販路も北海道から関西まで30以上の消費者グループ、生協、スーパー、米穀会社、地場産業（造り酒屋、味噌加工、製菓、製麺、レストランなど）とのネットワークができ上がり、需要を自ら創り出そうとする努力が総っている。

農業総自由化の時代を迎え、既存の流通機構だけに頼っている、なかなか先の見えない状況の中で、“小さな食管”とでも言うべき産直提携のシステムは地域農業の将来に活路を拓くものとして注目される。

技術的にも、さまざまな新しい試みが行われ、きめ細かな栽培管理の成果は年を追って確かなものになりつつある。

高畠町は古くからの乳牛の産地として名をはせた所だが、今でも健実な酪農家群が地域農業の土台を成している。そこから生産される厩肥を発酵、熟成させて、良質な堆肥として田畑に還元することを土づくりの基本としてきた。最近では、それに土壌菌を加えて完熟を促進するなど、工夫に余念がない。

また、会員の中にはレンゲ不耕起栽培など、草を活かした稲作に挑戦し、目を見張るような成果を上げつつある事例や、アイガモや鯉を放流して除草を省力化するなど、もう一つの先端技術が実用化されようとしている。

私自身は花巻市の小原氏のご指導をいただきな

がら、雪印種苗の開発したサクラワセ（極早生のイタリアンライグラス）を水田裏作に播種し、今春の生育を楽しみにしている。一部、アルサイククロバとヘアリーベッチの混播区を設け、試験の結果によって地域の適性を確認するために数名の有志と取り組み始めた。サクラワセは5月上旬に刈取らないままトラクターで耕耘し、すき込むことで堆肥の代替の役目を果たし、地力の培養が期待される。雪が降らない地帯では、冬場の荒涼とした裸地を緑に変え、美しい景観を創り出すこともできるであろう。

いずれにせよ、有機農業は単に昔に戻るというのではなく、現代の進んだ育種技術やこれからの分野である土壌微生物学や環境保全型の機械の開発などと結合して、省力化を図り、楽しく実現できるものでなければ発展しないと思われる。

そうした地域の中での新しい取り組みは、農業を巡る八方ふさがりの状況に穴を開け、希望の灯を点そうとしているように見える。

そうした実践を通して、私たちは大量生産の産業社会とは違うソフトな共生社会の輪郭を思い描くようになってきた。自然と人間、人と人が共に生きるやさしい永続的な世界である。農を中心軸にしなが、医療保健や福祉や教育文化などの領域を結び、丸ごと包括していく社会においては、老、壮、青、少の世代間の結合もまた可能である。

見渡す限りの大農場で、大型機械がうなりを上げ、空から肥料や農薬が降ってくる近代農法と違い、小さな規模で、等身大の技術を施す有機農業においては、お年寄りや子どもたちの出番も多い。あるいは、障害を持つ人でも懐に抱え込む柔らかさがある。そして、何よりも作物以外の植生や小さな生き物たちが豊かに生息できる環境が次第にでき上がってしまうことである。

先ほど、立教大学で行われたフォーラム「環境と生命'94」で、栗原彬教授が提起した「共生の技術としての有機農業」という概念は、単なる技術論や流通、消費の問題を超えて、文明論の段階に一步踏み込んだものである。今日の巨大産業や大量流通、大量消費のあり様が資源の浪費と公害などの環境問題を派生し、ひいてはゴミの山を築きつつ、次第に空洞化していく現実に直面している。

その大きな壁を乗り越えるには、産業の構造を根本から変えていくほかはない。具体的には、「手の技と小型の精密科学技術との新しい結びつきを基盤に、地域に新しい共同性を生み出していく中小規模の産業の像が浮び上がります」という栗原氏の論述は、「いま、日本で行われている有機農業は、来たるべき産業の最先端に立つものといえます」と展開していくのである。四半世紀に及ぶ私たちの地べたを這うような実践がそうした科学的な思想性に裏打ちされて、未来に向かう転換軸になろうとしていることに大きな喜びを感じる。

4 新しい地域創造に向けて

近年、私たちの町を訪れる都市の若者の姿が目立つようになった。有機農業運動を通して提携している消費者市民だけでなく、大学生を中心にした行動的な世代である。その動機づけは、グローバルな環境問題に関心を持ち、学習を深めていくうちに、自分たちが主人公になるはずの21世紀がどうなるのか、真剣に考え始めたことである。人間の生存基盤を成す食糧の生産が低迷し、反対に人口が爆発的に増えれば、深刻な食糧危機が訪れるのは自明であろう。とりわけ日本においては、食糧の自給率が年々低下し、穀物に至っては29%まで落ち込んでいる。一体、農村はどうなっているのだろうか。現地に足を運んで確かめなければいけないのではないのか。それも、環境破壊を伴わない方法で、安全で健康的な農業を実現している所はないのだろうか。そうした模索をするうちに、高島町にたどり着いたというのである。

最初、6年前に立教大学の学生部が主催する「環境と生命」のゼミが夏休みのフィールドワークに訪れて以来、早大、千葉大、筑波大、一ツ橋大、上智大、和光大、明治大、東京農大など、十指に余る大学のゼミやサークルが次々と訪れるようになった。さらに、「たかはた共生塾」が主催する「まほろばの里農学校」に応募する学生やOLなどを含めれば、年間300名を超える若者たちが自前で旅費を出し、農作業を体験するためにやってくる。初めて入る大自然の懐の中で、大地に向かい、汗を流し、生き物たちにふれる驚きと感動が或る種のカルチャーショックを伴い、いつしか若者たち

の内側に火を点す。夢中で1週間ほどを過ごすうちに、さまざまな発見をし、価値観や人生観が変わっていく人も少なくない。もちろん、地域の農民たちとの交流も楽しく、思考の深まりに一役買う場面である。

そこは優れた資質と感受性豊かな若者たちのこと、農業の持つ人間解放の魅力にとりつかれた者は機会をとらえて何回もやってくるようになる。そして、農への志の高まりの中で移住を希望する人たちが増えてきた。振り返ると、ここ2,3年の間に約20人の都市の若者が高島町の農村に定住したことになる。来春までに、あと数名がぜひ移住したいと志願しているようだ。その多くは、空き屋を一軒丸ごと借りて自由な暮らしを楽しみながら自給的な農業から始めている。他にももう一つ仕事を持ち、生活費を稼ぎながら、自然体で生きる喜びをかみしめているようだ。

そうした新農民を、元々の住民は温かく迎え入れ、田畑や暮らしの面倒をよくみてくれる。いわば開かれた村づくりが進んでいるのだ。まさに多彩な人材を受入れて、交流から創造へ、確実に村の空気は変わりつつある。長い有機農業の取組みが耕し続けた肥えた土壌に新しい芽が育ちつつあり、それは自立と互助の気風に満ちた地域共同体を創出しようとしているように見える。

本当の豊かさを求め、人間が再び大地に還る時代が始まろうとしている。それは、まさに生命文明の序章なのかも知れない。

